

# 経済・金融 フラッシュ

## 【6月米個人所得・消費支出】

消費支出は、大幅な増加となった前月の反動もあって伸びは鈍化

経済研究部 主任研究員 窪谷 浩

TEL:03-3512-1824 E-mail: kubotani@nli-research.co.jp

### 1. 結果の概要: 個人消費支出は前月から伸びが鈍化

8月3日、米商務省の経済分析局（BEA）は6月の個人所得・消費支出統計を公表した。個人所得（名目値）は、前月比+0.4%（前月改定値：+0.4%）となり、前月と同水準、市場予想（Bloomberg集計の中央値、以下同様）の+0.3%は上回った。一方、個人消費支出（名目値）は、前月比+0.2%（前月改定値：+0.7%）と、市場予想の+0.2%には一致したものの、前月から伸びが大幅に鈍化した（図表1）。また、価格変動の影響を除いた実質個人消費支出も、前月比▲0.02%（前月改定値：+0.4%）となり、市場の横這い予想に概ね一致したものの、僅かながらマイナスに転じた（図表5）。貯蓄率<sup>1</sup>は4.8%（前月改定値：4.6%）と前月から0.2%ポイント上昇した。

価格指数は、総合指数が前月比+0.2%（前月：+0.3%）と市場予想（+0.2%）に一致したものの、前月から低下した。また、変動の大きい食料品・エネルギーを除いたコア指数は、前月比+0.1%（前月+0.1%）と、こちらは前月および市場予想（+0.1%）に一致した（図表6）。なお、前年同月比では、総合指数が+0.3%（前月：+0.2%）、コア指数が+1.3%（前月改定値：+1.3%）となった（図表7）。

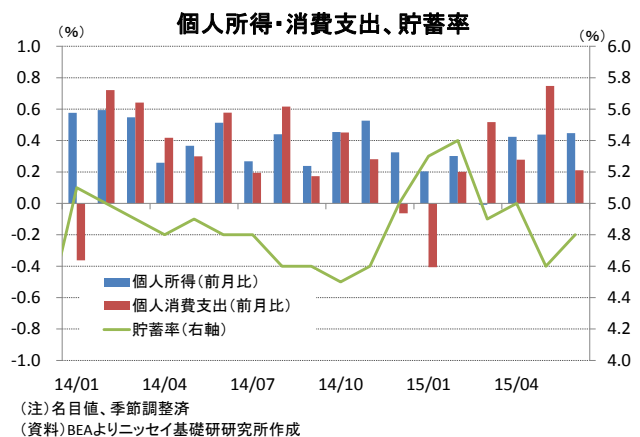
### 2. 結果の評価: 消費の伸びは鈍化

6月の個人消費支出（前月比）は、15年2月以来の低調な伸びに留まった。前月が非常に高かっただけにその反動がでたとみられるが、5月も+0.9%から+0.7%に下方修正されており、消費のモメンタムは強くない。

一方、個人所得は前月の底堅い伸びが持続しており、貯蓄率は、前月から小幅上昇に転じた。このため、所得との対比で消費は余力を残した形となった。

価格指数は、前月比ではエネルギー価格の上昇が鈍ったこともあり、総合指数は前月から伸びが鈍化した。前年同月比では、総合指数が前月から小幅上昇したものの、水準としてはゼロ%近辺に留まっているほか、コア指数もFRBが目標と

(図表1)



<sup>1</sup> 可処分所得に対する貯蓄（可処分所得－個人支出）の比率。

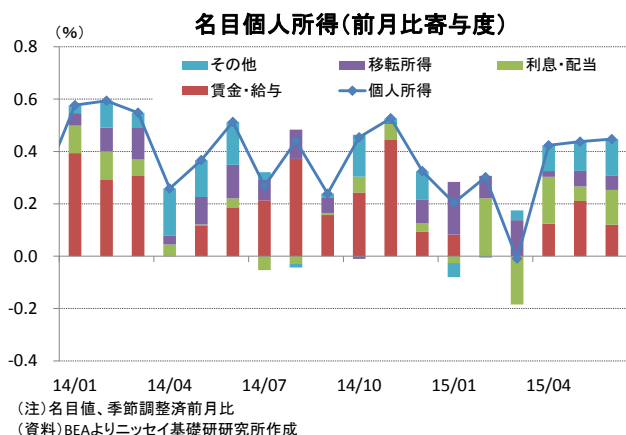
する 2% の水準を大幅に下回っており、物価上昇圧力はみられない。さらに、足元では再び原油価格が下落に転じていることから、今後物価には低下圧力が高まる可能性が高い。物価面からは、FRB が政策金利引き上げを急ぐ理由は見出し難いと言えよう。

### 3. 所得動向: 可処分所得は名目、実質とも前月から伸びが加速

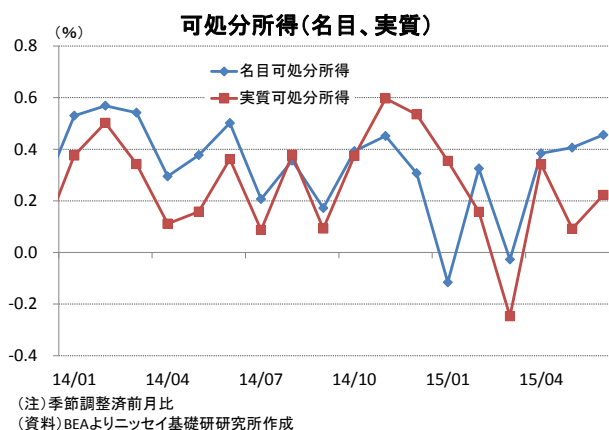
個人所得の内訳をみると、賃金・給与が前月比+0.2%（前月：+0.4%）と前月から伸びが鈍化する一方、利息・配当収入は+0.9%（前月：+0.4%）と前月から伸びが加速した（図表 2）。

次に、個人所得から社会保障支出や税負担などを除いた可処分所得（前月比）は、名目値が+0.5%（前月：+0.4%）と前月から伸びが小幅加速したほか、価格変動の影響を除いた実質ベースでも+0.2%（前月：+0.1%）と前月から伸びが加速しており、所得環境は底堅い状況が持続している（図表 3）。

（図表 2）



（図表 3）

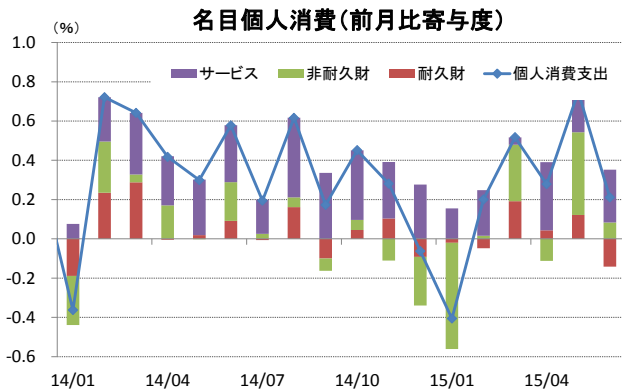


### 4. 消費動向: 耐久財が減少

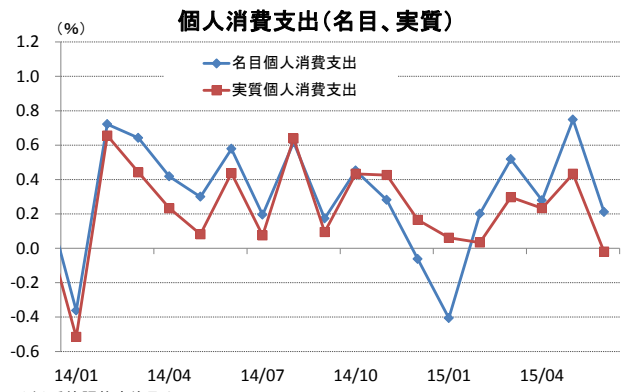
次に、個人消費の内訳をみると、財のうち、耐久財が前月比▲1.3%（前月：+1.1%）、非耐久財が+0.4%（前月：+2.0%）となったほか、サービスが+0.4%（前月：+0.3%）となった。サービスこそ前月から伸びが加速したものの、非耐久財で伸びが鈍化したほか、耐久財ではマイナスに転落した（図表 4）。BEAによれば耐久財の不振は自動車・自動車部品が主な要因となっているようだ。

一方、個人消費を物価変動の影響を除いた実質ベースでみると、前月比で▲0.02%（前月：+0.4%）と、僅かではあるものの 14 年 1 月以来のマイナスとなった（図表 5）。

(図表 4)



(図表 5)

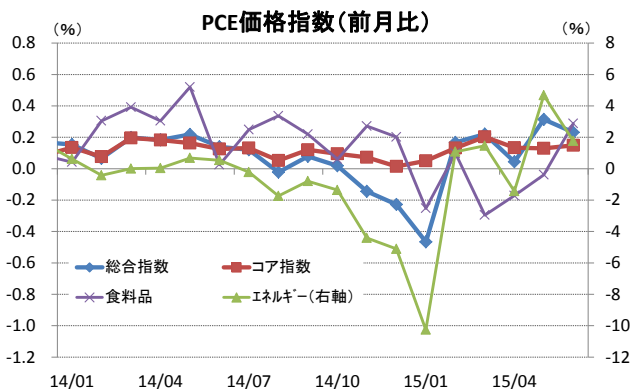


## 5. 価格指数:依然として物価上昇圧力はみられず

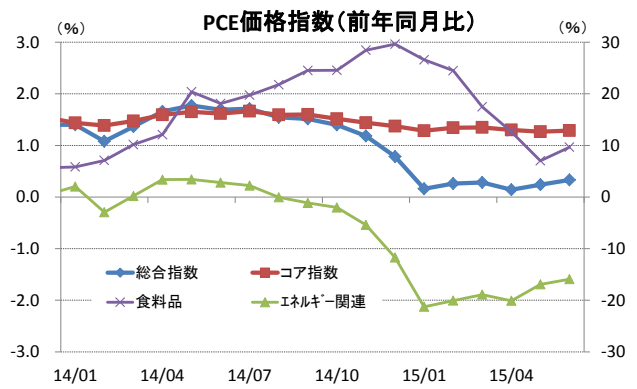
価格指数(前月比)の内訳をみると、エネルギー価格指数が+1.8%(前月:+4.7%)と、プラスを維持したものの、前月から伸びは鈍化した(図表6)。エネルギー価格指数は、15年1月の▲10.3%を底に安定する動きがみられていたが、春先に60ドル近辺まで回復した原油価格は再び50ドルを割れる展開となっており、再び物価の下押し圧力となる可能性が高い。一方、食料品価格指数は+0.3%(前月:横這い)とこちらは3ヵ月連続ぶりにプラスに転じた。

最後に前年同月比では、エネルギー価格指数は▲15.9%(前月:▲16.9%)と、前月からマイナス幅は縮小したものの、依然として2桁のマイナスが持続している(図表7)。一方、食料品価格指数は、+1.0%(前月:+0.7%)と、6ヵ月ぶりに前月から伸びが加速しており、食料品価格の物価上昇圧力の低下は一服した。

(図表 6)



(図表 7)



(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。